

地芝居の演目

—— 美濃・三河地域の場合 ——

安田 徳子

美濃・三河地域は全国でも村芝居のもっとも盛んな地域であった。村芝居の記録も江戸初期の天和・貞享の頃からあり、^①全国で最も古い地芝居記録も残っている。^②現在も岐阜県では二七団体の地芝居団体が活動しており、この数は全国で一番多い。この地芝居ではどのような演目が上演されてきたか。すでに郡司正勝氏や守屋毅氏が地域の信仰との関わりや農民の祝祭意識を指摘しておられるように、^③地芝居の演目には地芝居の特性や地域の特性がよく表れている。この地域の上演演目及び台本の調査を行ったので、これを分析して、この地域の地芝居の演目の特徴を見ておきたい。

(一)

美濃・三河地域は江戸時代から江戸・上方の中間、東西の文化が交流する位置にあった。また、西濃は京へは至近の距離であったし、

三都に次ぐ大都市、尾張藩城下名古屋がもっと至近な位置にあり、東濃の多くは尾張藩領でもあった。名古屋はその地域性を踏まえた独自の文化を育くんできたが、特に芸能は盛ん、歌舞伎については、阿国以来、東西を往来する途次の役者が足を留めて興行したり、上方から定期的に一座が巡業してきた。寛文四年(一六六四)には町外れの橋町裏に芝居処設置が許可され、松本名左衛門(大坂)・作屋九郎兵衛(江戸)が興行し、『尾陽戯場事始』『尾張大根』、元禄の頃までは大須真福寺や若宮八幡などの境内でも定期的に芝居興行が行われるようになり、在地の芝居一座(和泉屋座など)も形成されていた。東西を結ぶ東海道と中山道は勿論、伊那街道といった街道が、東西・名古屋、さらにはこの地域間を緊密に結びつけていた。こうした状況を背景に、三河新城では寛文四年(一六六四)「天王ノ林ニテ中村長門狂言尽芝居」(太田白雪『新城聞書』)が興行しているよ

うに、街道を往来する役者や名古屋在の一座の巡業によって歌舞伎に触れ、さらにそれが山間部にも広がり、冒頭に記した如く、天和・貞享の頃には東濃土岐郡で買芝居、宝永には飛騨上呂に地芝居の記録があり、買芝居から地芝居へと発展していったものと考えられる。

守屋氏が地芝居の全国的な規模での成立を「宝曆く天明」とされているように、上呂のような例もあるが、美濃垂井や三河足助などで宝曆・安永頃から継続的に地芝居が行われていた記録が残っており、各地で常套的になったのはこの頃からと思われる。

そこで上演されていた演目であるが、最古の上呂及び足助・垂井など古い例についてはすでに別項で述べたので詳細はそちらに譲るが、まだ元禄歌舞伎の頃の上呂の場合とはかく、足助・垂井の如く、宝曆・安永の頃には大歌舞伎で仕組まれた作品、特に義太夫狂言が上演され、中央の大歌舞伎や人形芝居で初演されたからそれほどの時を経ず、地芝居に取り込まれていた。すでに守屋氏・景山正隆氏⁸が指摘しておられるように、地芝居ではこの地域のみならず全国共通して義太夫狂言が演じられてきた。特に「キラ」と呼ばれるきらびやかな衣裳を着られる大時代な演目が歓迎されたこと、義太夫狂言は、語りによってしっかりした筋立てを聞かせることができ、素人の演技術でも楽しめることによるのであろう。また、祝祭日にふさわしい日常とは異質な世界・人物に変化・変身するには、歴史

上の事件を劇的に語る義太夫狂言は格好のものであったからである。ともあれ、中央で初演された作品が時を経ず取り込まれていることに、この地域の中央との交渉の緊密さを窺うことができる。また、郡司氏・守屋氏のご指摘のように、地芝居は祭礼や信仰と結びついて呪術性を込めて、特定の演目や演出を行ったり、特定の演目を避けたりすることがあった。この地域については、早川幸太郎氏が「地狂言雑記」（早川幸太郎全集2所収）において、三河設楽地域では盆狂言として亡者のために演じられた所があったことを指摘しておられるし、「三番叟」が祭祀的な意味を持って必ず演じられる地区は多いのであるが、美濃や三河ではこれ以外の特定の演目が特別の意味を持って演じられた例は見られない。

上演演目がどのようにして決められていたかは明らかではないが、現在は出演者と振付師の話し合いによって決められる場合がほとんどだという。別項で述べた如く、この地域では安永頃から振付師と呼ばれる演出・演技指導者が素人役者を指導した。振付師は近郷在の地役者が招聘されることが多かったようである。現在はこの地域には何人かの専業・兼業の振付師が在住する。六代目松本団昇（岐阜県山岡町在、平成一五年引退し娘松本団女が継承）・三代目中村津多七（岐阜県恵那市、平成一三年没、没後は妻二代目中村高女及び弟子吉田茂美が継承）・市川升十郎（愛知県豊川市、没後は弟子の

市川梅香・市川福升・市川三福及び妻市川寿々女らが継承）・中村竹昇(新城市在)などである。これらの振付師はいずれも旅役者や地役者の指導を受け、専業・兼業の役者経験を持ち、その一座の芸系を伝えている。指導の地芝居演目や演出に振付師の芸系が色濃く反映するのは言うまでもない。一人の振付師が複数の地区の指導に当たるので、同じ振付師の指導を受ける地区では同じ演目や演出が行われることとなる。

(11)

現在活動している地芝居団体のほとんどが昭和二〇後半から三〇年代前半にかけて一度途絶え、四〇年代以降に復活したもので、中絶以前と復活後が継続している所は少ない。復活後の状況しかわかりにくいのが、まずは現在の上演演目を把握するために、復活後の上演記録を持つ三箇所の上演演目一覧を提示する。

A、鳳凰座歌舞伎(岐阜県下呂町御厩野地区の劇場型農村舞台鳳凰座を拠点に活動。昭和三七年復活、同四六年以降、毎年五月に定期公演を行っている。師匠は平成一三年まで六代目松本團升、平成一四年以降市川福升)

B、白雲座歌舞伎(岐阜県下呂町門和佐地区の劇場型農村舞台白雲座を拠点に活動。昭和五三年以降、毎年一月に定期公演

を行っている。師匠は市川升十郎、没後は市川福升)
C、新城歌舞伎(新城市内で活動する地芝居七団体合同の活動で、昭和六三年から毎年一月に定期公演を行っている。師匠はこの中の五団体が中村竹昇)

演目	上演回数				参考	
	A	B	C	計	團升	竹昇
1 絵本太功記十段目尼ヶ崎閑居の段	8	9	4	21	○	○
2 一の谷嫩軍記(熊谷陣屋の場)	1	5	3	19	○	○
4 奥州安達ヶ原(二段目袖萩祭文の場)	6	4	4	14	○	○
5 奥州安達ヶ原(一段目文治住家)	2	0	0	2	○	
6 菅原伝授手習鑑(四段目寺子屋の場)	8	4	2	14	○	○
7 菅原伝授手習鑑 吉田社頭車引の場(車止)	3	2	4	9	○	○
8 増補手習鑑(菅原天神記)松王下屋敷の段	2	1	1	4	○	○
9 青砥稿花紅彩画(白浪五人男)稲瀬川勢揃の場	3	3	6	12	○	○
10 弁天娘女男白浪(白浪五人男)稲瀬川勢揃の場	2	2	4		△	
11 御所桜堀川夜討(三段目 弁慶上使の場)	4	5	1	10	○	○
12 御所桜堀川夜討(四段目 藤弥太物語)	1	0	0	0	○	○
13 新版歌祭文 野崎村	6	3	1	10	○	○
14 神靈矢口ノ渡(三段目 お舟頓兵衛住居の場)	4	4	2	10	○	○
15 義経千本桜(二段目 鮎屋の場)	4	4	1	9	○	○
16 義経千本桜(四段目 吉野山初音の旅)	3	2	0	5	○	○
17 義経千本桜(二段目 下市村権の木の場)	1	0	0	0	○	○
18 仮名手本忠臣蔵(七段目 祇園一力茶屋の場)	3	3	2	8	○	○
19 仮名手本忠臣蔵(三段目 殿中松の間)	0	1	0	1	○	○

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	
鬼一法眼三略の巻(三段目 今出川菊畑の場)	鬼一法眼三略巻(四段目 一条大蔵譚)	増補忠臣蔵 忠臣二度目清書 寺岡腹切	増補忠臣蔵 本蔵下屋敷	実録忠臣蔵 大石山科閑居妻子別れの場	義士外伝 土屋主税	義士十二刻 潮田又之丞住家	元禄忠臣蔵 南部坂雪の別れ	いろは仮名四十七訓 弥作の鎌腹	場・十一段目 師直屋敷討ち入りの場	物・殿中松の間の場・戸塚山中の場・ 四段目 扇ヶ谷塩冶館切腹の場・同表門の場・ 五段目 山崎街道鉄砲渡しの場・向二つ玉の場 ・六段目 与市兵衛内勤平腹切の場・七段目 祇園一力の場・九段目 山科閑居の場 仮名手本忠臣蔵通し狂言(大序 鶴ヶ岡八幡宮柱 前の場・三段目 松の廊下下刃傷の場・落人道 行旅路の花簪・五段目 山崎街道二つ玉の場・ 七段目 祇園一力茶屋の場・六段目 勤平住家の 場・十一段目 師直屋敷討ち入りの場	仮名手本忠臣蔵通し(大序 鶴ヶ岡八幡宮の場 ・二段目 桜井館の場・三段目 足利館門前進 物の場・殿中松の間の場・戸塚山中の場・ 四段目 扇ヶ谷塩冶館切腹の場・同表門の場・ 五段目 山崎街道鉄砲渡しの場・向二つ玉の場 ・六段目 与市兵衛内勤平腹切の場・七段目 祇園一力の場・九段目 山科閑居の場 仮名手本忠臣蔵通し狂言(大序 鶴ヶ岡八幡宮柱 前の場・三段目 松の廊下下刃傷の場・落人道 行旅路の花簪・五段目 山崎街道二つ玉の場・ 七段目 祇園一力茶屋の場・六段目 勤平住家の 場・十一段目 師直屋敷討ち入りの場	仮名手本忠臣蔵(五段目 山崎街道)	仮名手本忠臣蔵(四段目 判官腹切)	仮名手本忠臣蔵(三段目 戸塚山中の場 落人)	仮名手本忠臣蔵(三段目)
0	1	1	1	0	0	1	1	2	1	0	1	0	1	0	
0	3	0	1	0	0	0	2	0	0	1	1	1	0	1	
1	4	0	2	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	
1	8	1	4	1	1	1	3	2	2	3	2	1	1	1	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35				
本朝廿四孝 十種香の場	源平魁躰 扇屋熊谷の段	藝妖術滝夜叉譚 岩屋の段	鎌倉三代記 三浦之助家の場	陸奥白萩伊達実記 老後政岡綱村館の場	伽羅先代萩 御殿から床下の場	忠節女夫松(実録千代萩) 浅岡御殿の場	傾城阿波の鳴門 どんどう大師の場	八島日記 後日譚 日向島	娘景清 八島日記 日向島 人丸別れの場	艶谷女舞衣 三勝半七酒屋の場	二月堂良井杉の由来 親子対面の場	蝶千鳥 曾我の物語 由比ヶ浜の場	児模様 曾我館染 由比ヶ浜の場	三国一曾我の礎 由比ヶ浜の場	吉例 蝶千鳥 曾我の対面	寿曾我の対面	近江源氏先陣館(八段目 盛綱陣屋の場)	浄瑠璃 三番叟	寿二人三番叟	寿式三番叟	恋飛脚 大和往来 封印切/新口村	恋飛脚 大和往来 新口村	心中 宵庚申 八百屋献立	恋女房 染分手綱 重の井子別れの場
3	3	4	1	0	2	5	1	5	2	1	3	0	3	0	0	5	2	5	8	6				
2	1	0	2	1	4	0	2	0	3	3	2	0	3	6	6	0	1	2	0	1				
0	0	0	1	1	1	0	2	1	1	2	1	3	1	0	0	2	0	0	0	1				
5	4	4	4	2	2	5	5	6	6	6	6	6	6	6	6	7	3	7	8	8				
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
			○	○	○	○	○	△ d	○	○								○	○	○				

76	扇的西海硯 乳母争い	1	0	0	1	○	△f
75	浮世柄比翼稲妻 仲之町鞘当	1	0	0	1	○	
74	妹背山婦女庭訓 御殿	1	0	0	1	○	○
73	糸桜本町育 仲野町・糸屋中根屋	1	0	0	1	○	○
72	源平味分牡丹 島山重忠館の場(牡丹景清)	0	1	1	2	○	○
71	だんまり御目見得	1	1	0	2	○	
70	御目見得童だんまり	1	0	1	2	○	○
69	与話情浮名横櫛 切られ与三郎	1	0	1	2	○	○
68	梶原平三 菅石切 鎌倉八幡神社社頭の場	1	1	0	2	○	○
67	三浦大助 紅梅釣 石切梶原(菅石切)	2	0	0	2	○	○
66	平家女護島 俊寛	2	0	0	2	○	○
65	双蝶々 曲輪日記 引窓	2	0	0	2	○	○
64	曾我十二時 揚巻助六	0	0	2	2	○	○
63	三人吉三 巴白浪 大川端庚申塚の場	0	1	0	2	○	○
62	菅屋道満 大内鑑 狐葛の葉後日譚の場	0	2	0	2	○	○
61	ひらがな 盛衰記 源太勘当の場	2	1	0	3	○	○
60	吹雪花 小町於静 小磯が原	3	0	0	3	○	△e
59	箱根靈験記 躰仇討滝の場	1	2	0	3	○	○
58	東海道中膝栗毛 弥次喜多赤坂並木の場	1	2	0	3	○	○
57	信州川中島合戦 輝虎配膳の場	1	1	1	3	○	○
56	生写朝顔日記 島田の宿・大井川の場	1	1	1	3	○	○
55	源平布引滝 実盛物語 九郎助住家の場	1	1	1	3	○	○
54	源平布引滝 二段目 義賢館の場	2	1	0	3	○	○
53	歌舞伎十八番の内 勸進帳	0	2	1	3	○	○
52	鏡山旧錦絵 草履打ちから敵討ち	0	3	0	3	△b	○
51	本朝廿四孝 筒掘り	4	0	0	4	○	

99	御所五郎蔵	0	0	1	1	○	○
98	歌舞伎十八番 連獅子 石橋	0	1	0	1	○	○
97	世迷仇横櫛 鳥居峠より友之助住家	1	0	0	1	○	○
96	由良湊千軒長者 安寿厨子王山の別れ	1	0	0	1	○	○
95	弓張月源家 鎗矢 八丈島の場	0	0	1	1	○	○
94	雪夕恵鉢木 佐野源左衛門住家	1	0	0	1	○	○
93	蕨樹累物語 土橋の段	0	0	1	1	○	○
92	藤娘	0	0	1	1	○	○
91	白虎隊秘聞 飯盛山時雨	1	0	0	1	○	○
90	彦山権現 誓助劔 毛谷六助住家の場	0	1	0	1	○	○
89	番町皿屋敷	0	0	1	1	○	○
88	雷神不動 北山桜 鳴神北山岩屋の場	0	1	0	1	○	○
87	難波戦記(難破船記) 重成血判取	0	1	0	1	○	○
86	時今也 桔梗旗揚 馬籠・愛宕山の場	0	0	1	1	○	△g
85	壺坂靈験記 お里沢市	1	0	0	1	○	○
84	玉藻前 磯快 道春館	0	1	0	1	○	○
83	曾我中村	1	0	0	1	○	○
82	碁太平記 白石嘶 新吉原揚屋の場	0	1	0	1	○	○
81	是評判 浮名読売 油屋	1	0	0	1	○	○
80	恋娘 昔八丈 城木屋	1	0	0	1	○	○
79	極付 鈴が森	0	1	0	1	○	○
78	岸姫松 譽鑑 朝比奈上使	1	0	0	1	○	○
77	霞時金の小柄 日傘の由来	0	0	1	1	○	○

注、名題・別称は各団体・各振付師によって多少の相違があるが、より一般的な名称で統一した。名題が異なるが同一作品と認められるものは両名題を挙げて、同一枠の中に示した。演目は上演回数

の多い順に挙げた。但し、同作品異場面等関わりの深いものについては、比較しやすいように纏めて挙げた。(平成一五年公演まで)

参考) 団升・竹昇両振付師の所蔵台本を挙げたが、升十郎師の台本は未調査。猶、○印は台本有、△は名題が異なるが同一作品と認められるものを有することを示す。団升・竹昇両師所蔵台本の全目録は、「平成13・14・15年度科学研究費補助金報告書」に掲載した。表中の△に該当する名題を次に挙げておく。団升所有…a 青砥稿花紅彩画 浜松屋・b 加賀見山旧錦絵(鏡山) 尾上部屋 門外 竹昇所有…d 日向島 非人景清 人丸別れの場・e 契情曾我郎 名鏡(お静礼三) 小磯ヶ原・f 那須野与市扇的の場・g 時今天下知皇哉

(三)

右の表から気づくことは、三団体の復活時期が異なり、その後の歴史の長さが違うので、簡単に比較しがたいが、「絵本太功記 十段目」「一の谷嫩軍記 熊谷陣屋の場」の上演が圧倒的に多いことである。これに続いては「奥州安達原 三段目」「菅原伝授手習鑑 寺子屋の場」「白浪五人男 稲瀬川勢揃の場」である。これらはいずれも大歌舞伎においても人気の演目として現在もよく上演されている作品であるが、いずれも主要登場人物が多く、見せ場も多い。「白浪五人男 稲瀬川勢揃の場」以外は義太夫狂言で筋立てがしっかりしており、観客の共感も得やすいものである。これらの作品は、この地域のみならず、全国どここの地芝居においてもよく上演されており、地芝居上演作品の特徴をよく示すものと言えよう。また、「菅原伝授手習鑑」は「寺子屋」の他、「車引」もよく上演され、さ

らに「松王下屋敷の場」と呼ばれる明治期に増補された場までしばしば上演されている。「義経千本桜」は三段目の「鮎屋の場」と四段目の「吉野山道行」がよく上演され、「椎の木の場」も加えれば、表でも一五回の上演が記録されており、やはり人気の作品である。「仮名手本忠臣蔵」は一場面ずつ取り上げれば、上演回数は「七段目祇園一力茶屋の場」の八回がもっとも多いのであるが、鳳凰座・新城歌舞伎で通し上演が行われている如く、全段に亘って上演され、全段で見れば「絵本太功記 十段目」「一の谷嫩軍記 熊谷陣屋の場」と共に、地芝居における最多上演作品である。「仮名手本忠臣蔵」は大歌舞伎でも独参湯と呼ばれ、当たらないことのない作品だったというが、地芝居においても人気は同じことだったようだ。加えて、地芝居では明治になって作られた「義士外伝」など忠臣蔵の増補物も非常に多く上演されている。これも「忠臣蔵」の人気を裏付けるものである。この他、「御所桜堀川夜討 弁慶上使の場」「新版歌祭文 野崎村」「神靈矢口ノ渡 頓兵衛住居の場」「鬼一法眼三略 巻 一条大蔵譚」「鬼一法眼三略の巻 菊畑の場」「恋女房染分手綱 重の井子別れの場」「恋飛脚大和往来 封印切新口村」「近江源氏先陣館 盛綱陣屋の場」「寿曾我の対面」なども大歌舞伎と共通した人気演目である。しかし、例えば「二月堂良弁杉由来」は地芝居では母親は百姓女で渚の前ではないなど、大歌舞伎と共通した演

目でも、地芝居独自に書き換えられている場合もあり、各所に独自の演出もある。この場合、中央と地芝居の相違ということもあるが、振付師によって演出が異なる場合も多い。概して地芝居の場合、丸本に拠っている場合が多いこと、チャリ風の入れ事がある場合が多いこと、心理が動作で示されることなどが挙げられる。

上演演目のもう一つの特徴は、ほとんど大歌舞伎では見られない作品がかなりあることである。例えば「心中宵庚申 八百屋献立」「由比ヶ浜」「八島日記 日向島」「陸奥白萩伊達実記 老後政岡」「忠節女夫松(実録千代萩) 浅岡御殿の場」あるいは前述した「松王下屋敷」や「忠臣蔵」の増補物「本蔵下屋敷」「忠臣一度目清書 寺岡腹切」、義士外伝物の「弥作の鎌腹」「潮田又之丞住家」、実録物「大石山科閑居妻子別れの場」などである。「八百屋献立」は近松門左衛門の原作を書き換えたもので、上方では天明期から幕末にかけて大歌舞伎でもよく演じられてきた作品であるが、明治以降は中小芝居で上演されてきたものであった。また、「陸奥白萩伊達実記 老後政岡」は伊達騒動の後日談で寛政一一年(一七九九)三月初演の「伊達衣裳曲輪好」の五立目が原拠(『演劇百科大事典』)だが、大歌舞伎ではほとんど行われず、主に中小芝居の演目であった。その他、「忠節女夫松(実録千代萩) 浅岡御殿の場」「松王下屋敷」「本蔵下屋敷」「忠臣一度目清書」「弥作の鎌腹」「潮田又之丞住家」「大石山

科閑居」もまた中小芝居を中心に上演されてきたものである。地芝居にしか見られない演目のかんりの作品が、中小芝居の演目で、中小芝居・旅芝居がほとんど絶えてしまったため、地芝居にしか残っていない状況になったのだと知られる。

また、「由比ヶ浜」は鳳凰座では「三国一曾我の礎 由比ヶ浜の場」の外題で、白雲座では「児模様曾我館染 由比ヶ浜の場」、新城歌舞伎では「蝶千鳥曾我の物語 由比ヶ浜の場」の外題でそれぞれ演じられているが、内容は父を殺された曾我兄弟一万(十郎)・箱王(五郎)が、後日を憂いた頼朝の命令で由比ヶ浜に引き出され、敷皮の上で首を刎ねられそうになったが、畠山重忠の諫言によって赦免され、危うく助かるといふものである。団升師の所蔵台本目録には鳳凰座上演の外題で見え、「地芝居のみ保存伝承している芸題」に分類され、作者は「嵐鱗花」とある。しかし、類似した内容は慶応二年(一八六六)江戸守田座初演の河竹黙阿弥作「富士三升扇曾我」通称「曾我の敷皮」にある。竹昇師の拝見した所蔵台本には含まれていなかったが、本作品は伝承されている由である。一方で竹昇師は「富士三升扇曾我」の「三段/四段 門外より満江別れまで」及び「曾我の対面」「満江家」の場の台本を所有されている。未だ「三国一曾我の礎 由比ヶ浜の場」の台本を精読する機会を得ていないので、両作品の関係は明瞭ではないが、「富士三升扇曾我」を

嵐鱗花が書き直したということかも知れない。また、「八島日記 日向島」は鳳凰座では「八島日記後日譚 日向島」の外題で、新城歌舞伎は「嬢景清八島日記 日向島人丸別れの場」の外題で上演されているが、同一のものである。団升師の目録にはやはり「地芝居のみ」の芸題中に「嵐鱗花」作として載せ、別称として「非人景清」とある。竹昇師の台本には「日向島 非人景清 人丸別れの場」とある。「嬢景清八島日記」は明和元年(一七六四)一〇月大坂豊竹座初演の浄瑠璃で、本作品はその三段目「日向島の段」を歌舞伎に移したものである。三段目を中心に江戸時代から明治までしばしば上演されているが、現在は大歌舞伎では全く上演されていない。この地域の地芝居で上演されているものは、あるいは嵐鱗花が浄瑠璃を元に改作したものかも知れない。

この他に「藝妖術滝夜叉譚 岩屋の段」「箱根靈驗覽仇討 滝の場」「吹雪花小町於静 小磯が原」「曾我十二時 揚巻助六」「糸桜本町育 仲野町 糸屋中根屋」「扇的西海硯 乳母争い」「霞時金の小柄 日傘の由来」「岸姫松轡鑑 朝比奈上使」「源平咲分牡丹 畠山重忠館の場(牡丹景清)」「恋娘昔八丈 城木屋」「曾我中村」「難波戦記 重成血判取」「白虎隊秘聞 飯盛山時雨」「雪夕恵鉢木 佐野源左衛門住家」「弓張月源家鎗矢 八丈島の場」「由良湊千軒長者 安寿厨子王山の別れ」「世迷仇横櫛 鳥居峠より友之助住家」などもまた、現在

の大歌舞伎ではほとんど見られない。この中で「弓張月源家鎗矢 八丈島の場」は明治一四年(一八八一)三月市村座初演の三代目河竹黙阿弥作品の一場面、明治年間には東西で中小芝居を中心にしばしば上演された『演劇百科大事典』というが、近年は地芝居でしか上演されない。

また、「藝妖術滝夜叉譚 岩屋の段」「曾我十二時 揚巻助六」「源平咲分牡丹 畠山重忠館の場(牡丹景清)」はこの地域あるいはそれ以西の地芝居でしか見られないものと言われている。団升師の目録には「藝妖術滝夜叉譚 岩屋の段」「源平咲分牡丹 重忠館の場・綴引の場」が載り、前者の作者は「山東京伝」、後者は「不明」となっている。竹昇師の台本は「源平咲分牡丹 重忠館の場」だけだが、新城曰子の振付師だった市川桃蔵旧蔵台本⁽⁴⁾には「曾我十二時 揚巻助六」もあり、竹昇師も演出は伝承している。「源平咲分牡丹」は源平合戦後日で、平家の嫡孫六代は鎌倉方に捉えられ、畠山重忠屋敷に預けられているが、鎌倉より六代の首を討って差し出すように命じられる。重忠の妻奥芝は実は景清妹で重忠とともに六代の命を助ける。そこへ六部に身をやつした景清が現れ、六代の後事を引き受ける、というもの。長野県大鹿村に「六千両後日之文章 重忠館の段」なる地芝居が伝わるが、これが「源平咲分牡丹 重忠館の場」と内容が酷似しており、原拠は同一のものと思われる。これを北限

として中国地方まで地芝居では広く行われている作品だが、大芝居では全く上演されることがない。三河岡崎辺の旅役者の作だとの伝承がある。「曾我十二時 揚巻助六」は「助六」と「対面」を合体した内容で、助六実¹²は曾我五郎は「助六」のままだが、揚巻実¹²は曾我十郎、意休ではなく工藤祐経で、前半は「助六」の筋で進み、三人が見頭となったところで「対面」となる。三河・東濃辺の地芝居のみで行われており、嵐鱗花作の伝承がある。福地桜痴作『十二時 会稽曾我』との関わりが窺われるが、典拠は不明。「暮妖術滝夜叉 譚 岩屋の段」は団升師が伝承するものだが、「山東京伝」作というのは原作『善知鳥安方忠義伝』のことで、台本作者は未詳というべきであろう。将門の娘滝夜叉姫が、無念を残して滅びた父の野望を果たそうとしたが追いつめられ、暮妖術を持って戦うというもの。京伝の原作を脚色した天保七年（一八三六）七月市村座初演「世善知相馬旧殿」の大詰常磐津「忍夜恋曲者」が大幅に改作されたもの。この作品は団升師振付の地芝居以外では見られない。

(四)

中央の芝居で演じられなくなったり、演じられたことのない芝居がなぜ地芝居で演じられているのか、こうした側面をもう少し追求しておきたい。

この地域の地芝居で演じられている作品は各振付師が伝承してきたものであるが、振付師の多くは先に述べた如く、旅芝居の経験者が多く、そこで覚えた作品や演出をもとにしている。したがって現在地芝居のみで演じられる作品は、旅芝居で演じられてきたものと見てよい。中央の大芝居や小芝居で演じられていた作品が旅芝居でも演じられ、地芝居に伝わったものである。しかし、中央では全く演じられなかったものは、旅役者や地役者自身が創作したと考えられる。前項でも触れたが、団升師の目録あるいはその他の伝承でも「嵐鱗花」作とする作品がいくつかある。これらはそれである。また団升師の目録には「大和家光松」作とするもの、「松本団升」自身の作もある。団升師の目録で、「嵐鱗花作」とするものは前項で触れた他に、「越前葵金乃鯨鉾 越前館の場・関根弥十郎住家の場」「博多三勇士 宗福寺・千菊丸立腹の場」の二作が掲げられている。

ところで、嵐鱗花は三河刈谷在の旅役者で、一座を率いて幕末から明治にかけて尾張周辺を中心に活躍した。鱗花率いる一座の芝居を鱗花芝居といい、鱗花自身が書いた脚本による独自の芝居を演じていた。これについては、嵐鱗花に実際逢ったという木村錦花が詳細に述べているが、その中に、

鱗花はふしぎに文才のあった人で、その上浪花節の語り物を悉

く暗記していた。暇があると一と間にこもって脚本を書くのが道楽の一つ、それには「佐野鹿十郎」「肥後駒下駄」「宮本左門之助」「御三家三勇士」「元和三勇士」などがある。いずれも浪花節種であるが、五幕や六幕の通し狂言などは、十日もかかれば書上げてしまうという健筆家だった。

とある。鱗花の名の見える番付が名古屋清寿院(安政四年八一八五七)五月六月、若宮(文久二年八一八六二)一月にあるが、これはまだ独自の一座ではなさそうである。しかし、名古屋新守座の番付に、明治一四年(一八八一)九月二日より「敵討肥後駒下駄」とあり、同じく一〇月六日より「敵討高砂松・蔦銀杏恋の横櫛」、一〇月二五日より「敵討安永録」、明治一五年九月「三勇士荒川実記」、同一〇月「種葉権現廻船噺・大岡政談噂古市」、同「敵討筑後曙」、明治一六年八月「実録髭顔譚」、明治一九年四月「佐野鹿十郎実記」、また、知多大野及びその他で明治一五〜一七年頃興行した時のものと思われる「敵討荒川実録・敵討筑後曙・義兄弟三家英勇」の番付は、所謂鱗花芝居のものである。これらには、「敵討高砂松」や「敵討安永録」のように大芝居の外題も見えるが、前掲の木村錦花の紹介する「佐野鹿十郎」「肥後駒下駄」「御三家三勇士」「元和三勇士」「義兄弟三家英勇」がこれであろう)などの芝居が見え、錦花の記述が裏付けられる。これらの演目はほとんどが英雄豪傑敵討譚で鱗

花芝居の特徴が窺えるが、錦花が「浪花節種」と述べているように、ほとんど浪花節あるいは講談を脚色したものであった。錦花は挙げていないが、「敵討筑後曙」も講談「笹野名槍伝」によるものである。ただ、「敵討肥後駒下駄」は明治一〇年頃上方において勝彦蔵が中村宗十郎と初代中村鴈治郎の為に書き下ろしたもので、小芝居の演目であったという(『演劇百科大事典』)。鱗花の脚本が残っていないので、確証はないが、鱗花が書き直したものだかもしれない。

また、錦花の記述に見える「宮本左門之助」の芝居は、前述の市川桃蔵旧蔵台本の中に「宮本左門之助出合仇討(天神記出合仇討)」と題するものがある。これがそれではなからうか。また、桃蔵台本の中には団升目録に鱗花作とする「越前葵黄金鯨鉾」「博多三勇士」「日向島八島日記(非人景清)」もある。あるいは東美濃ふれあいセンター保管の伊藤恵美子氏所有台本(東濃の地役者市川栄三郎旧蔵)・後藤勇一氏(市川源重、東濃の地役者、地芝居の振付師)旧蔵台本にも「越前葵金の鯨」「博多三勇士」はある。この台本中には「源平咲分牡丹(六部景清)」「曾我十二時 揚巻助六」「日向島八島日記(非人景清)」もある。鱗花の作品は鱗花芝居のみならず、他の旅芝居の一座にも伝えられ、演じられていたことが窺われる。猶、先代(五代目)の団升の一座には鱗花の弟子がおり、その人を通じて鱗花

の作品は現団升(六代目)に伝わったという。中京圏には嵐姓で「鱗」の付く役者がしばしばある。これらは鱗花の流れを汲む者かもしれない。そういう弟子たちの手で鱗花の芝居はこの地域に広がり、それが美濃・三河の地芝居に残ったのであろう。さらに、この鱗花作の芝居は意外に広く伝わったらしい。前に触れた「源平咲分牡丹」は中国路まで行われているし、播州歌舞伎の先代嵐獅山の上演記録⁽⁶⁾の中には「越前青井金鯰鉾」「博多三勇士」「揚巻助六」など挙げられているのである。

この鱗花のような多作な役者はそうはいなかったであろうが、旅役者の中には自ら創作して演じた者が他にもいたであろうし、全くの創作でなくとも、その一座や興行の土地に合わせて書き換えた演出を工夫したりして演じられたであろう。そうした演出が、自身や弟子たちによって、地芝居に伝えられたのである。

ところで、団升師目録で自作とされる二作は「恵那礎阿木実記」岩村城内書院評定の場・飯沼在百姓茂助の家・阿木街道橋の場・代官屋敷はなれの場・代官屋敷前の場」と「文覚上人緑大杉 重造住家の場」で、いずれも東濃の地に纏わる出来事を素材としたもの、所謂御当地物である。他にも振付師によって作られた土地に纏わる作品は地芝居に残っている。中津川には「王政復古錦之旗揚 横田元綱勇戦記」(市川源童作)、東三河には「中山義民伝 三段目」

(裏山高治郎作)、足助には「足助次郎重範」(嵐喜雀作)などである。これこそ地芝居ならではの演目と言えよう。

(五)

以上見てきた如く、地芝居の演目は、大歌舞伎と共通するものでも独自の書き換えや演出がある。また、中央ではすでに演じられなくなった演目が残っていることも多い。地方役者の創作による独自の演目もある。中央で作られた演目でも旅役者が書き直して演じた場合も多かったらしい。美濃・三河では、地役者や旅役者経験者が振付師として活躍しており、この地域の地方芝居や旅芝居の作品や演出が強く反映しているのである。中でも、明治期に活躍した嵐鱗花の作品が数多く残っているのが注目される。

地芝居の上演作品は、絶えてしまった作品の実態を知る貴重な資料であり、一方では極端に少ない地方芝居や旅芝居の貴重な資料もある。本論では演目を概観したに過ぎないが、もっと詳細な検討が必要であろう。

注

(1) 天和三年(一六八三)恵那岩屋観音開帳に尾州相模太夫の操と吉沢千勝太夫歌舞伎が上演されたこと、貞享四年(一六八七)二月

二一日には狂言尽し尾州吉沢十三郎座を招聘したこと、『土岐郡大島村安藤氏覚書』(岐阜県史資料編154)などを拾うことができる。

(2) 飛騨上呂久津八幡宮祭礼記録(『岐阜県史』資料編)が宝永三年(一七〇六)から残っており、ここに地芝居を上演した記録が見える。

(3) 郡司正勝『地芝居と民俗』(民俗民芸叢書58 一九七一・二 岩崎美術社)、守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』(叢書 演劇と見世物の文化史 一九八八・七 平凡社)

(4) 拙稿「足助町の地芝居」(『名古屋芸能文化』一九九四・一二)及び同「地芝居の上演と振付師―三河・美濃の地芝居資料と台本の検討から―」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』二〇〇四・三)

(5) 注(3)の守屋氏著参照。

(6) 注(4)参照。

(7) 注(3)の守屋氏著参照。

(8) 景山正隆『愛すべき小屋―村芝居と舞台の民俗誌―』(一九九〇・九 冬樹社)

(9) 注(1)参照。

(10) 注(4)「地芝居の上演と振付師―三河・美濃の地芝居資料と台本の検討から―」参照。

(11) 市川桃蔵旧蔵台本一覧は「平成13・14・15年度科学研究費補

助金報告書」に掲載した。

(12) 安田文吉「三河の地芝居『曾我十二時 揚巻助六』の場合」(ふるさと文化学研グループ編『山吉田史』二〇〇三・四)

(13) 木村錦花「万人講の鱗花芝居」(『興行師の世界』一九五七・四 青蛙房)及び同「旅芝居今と昔 鱗花芝居のことなど」(『演芸画報』一九三四・三)

(14) 御園座演劇図書館・名古屋女子大学付属図書館及び架蔵の番付を参照した。

(15) 東美濃ふれあいセンター保管台本一覧は「平成13・14・15年度科学研究費補助金報告書」に掲載した。

(16) 兵庫県多可郡中町のホームページ中の「ここにあり播州歌舞伎」に紹介されている「外題一覧「播州芝居狂言控」」を参照した。また、金関丈夫「博多三勇士」(『九州文学』一九五三・一一)によると、京都の小芝居でも田舎廻りの一座によって「博多三勇士」「揚巻助六」などが上演されていたという。

追記 本稿は平成一五年度科学研究費補助金 基盤研究(c)による研究成果の一部である。貴重な資料の閲覧をご許可下さった鳳凰座・白雲座・新城歌舞伎の各保存会、松本団升・中村竹昇両師に謝意を表します。